

学校だより 三和中シュワッチ!



校長 宮里直哉

三和中学校183

子ども達のほのかな輝きを受け止めてあげたい

ゴールデンウィークも終了。新型コロナ対策が見直され行楽地はひさしぶりににぎわった連休でしたが、どう過ごされたでしょうか。

ゴールデンウィーク明け、沖縄では梅雨入りの時期でもあります。大人の我々でも憂鬱になりがちな“5月”、生徒の皆さんには、何か目標を見つけ、張りのある生活を送ってほしいものです。

4月は、生徒の皆さんが、学校生活の色々な場面で、意欲的に取り組んでいる様子が見られました。

生徒会では、放送委員が給食時間に爽やかな放送を届けてくれ、美化委員も朝の草花への水かけを丁寧に行ってくれ、図書委員も本の貸出活動を頑張っています。1年生の授業では、発表や質問が多く活気に満ちており積極的な姿勢は、先生方を驚かせています。体育の時間のシャトルランでは、どのクラスも全員懸命に取り組んでおり、仲間を鼓舞する姿が見られます。放課後の運動場や体育館では、上級生が1年生を引っ張り部活動が活気づいています。みそあじ運動(みなりを整える・そうじをきちんと行う・あいさつをしっかりとる・じかんを守る)もおおむね順調です。…みんな新しい学校生活の中に、ゆっくりとはいりこんでいっています。

さて、連休中、『蛍』を見ました。「もうこの時期がきたのか」とうれしくなりました。闇夜に、光るほんわりとした光が、こんなにも心を穏やかにするのですね。自然は確かに動いています。

子ども達も日々変化しています。そんな子ども達のほのかな輝きを受け止められる目と心を大切にしたいです。

校歌を作詞、作曲した先輩方に想いを馳せる

今号の裏面には、本校校歌の作詞をなさった森英夫(遠藤石村)さん、作曲をなさった渡久地政信さんについて紹介された「糸満市中央図書館・館長だより」等を載せています。

森英夫さんは遠藤石村さんのお名前でも活動なさっており沖縄俳句界のレジェンド、渡久地政信さんはレコード大賞を受賞した国内でもとても有名な作曲家です。お二方とも“知る人ぞ知る”方なのですが、恥ずかしながら不勉強な私は、本校出身で糸満市立図書館館長の金城毅先生から教えていただくまで知りませんでした。

そんな私ですが、戦後すぐに故郷三和の復興、後輩の活躍を祈念して作詞された森先生や、後の大作曲家へ依頼した三和の方々の想いやその想いに応えた渡久地先生の心中をおもんばかると、胸が熱くなります。三和中学校の校歌には、深い意味合いがあり、いつまでも輝き続ける誇りであることを我々職員は子ども達に伝えていかなければいけない、と身の引き締まる思いです。後々まで語り継がれるお二人による校歌、これまでも、これからも“宝もの”として、歌い継いでいきます。

※本校ホームページに校歌があります。

※糸満市ホームページにある「市民の歌」もお二人による作詞、作曲です。

4月28日(金)遠足がありました

1年生は「平和創造の森公園」、2年生は「糸満観光農園」、3年生は「北名城ビーチ」にて、レクやゲーム、清掃など、充実した活動を行いました。

1年生の所には、昼食終了の時間にお邪魔しました。どの顔も笑顔いっぱい午前中のオリエンテーリングを存分に楽しんだようでした。午後のしっぽ取りゲームに向けて、嬉しそうに整列していました。2年生の所には、クラス対抗の長縄跳びをしている最中にお邪魔しました。大きな声で懸命に声かけあって1本でも多く跳ぼうとみんな必死です。跳ぶ回数が更新されるたび拍手が起こっていました。3年生は、私がお邪魔した時には昼食時間でした。日差しの強い中、木陰を求めて友達同士で食事中でしたが、限られたテントや影のスペースに入れなかった生徒の皆さんに熱中症を注意するように声をかけると、「楽しいから大丈夫です」と明るいトーンで返事が返ってきました。

全員無事、何ごともなく終えたアツイ1日、生徒の皆さん、いい表情をしていました。



裏面に続く



遠藤石村

製糖期の日が どっしりと 村つつむ

糸満市字真壁の真壁公園の中に石碑が建てられている。糸満市が生んだ俳人遠藤石村の句碑である。琉球新報社が毎年「石村賞」を設けて沖縄俳壇の登竜門となっている。本名は翁長蒲太郎だ。彼は字真壁の貧しい家庭に生まれながら、奨学金で慈恵医大を卒業し耳鼻科医として東京で開業した。医師としての仕事の傍ら俳句や書道を嗜んでいた。昭和 31 年から琉球俳壇の選者として活躍し昭和 52 年帰郷中に急逝するまで 21 年間の長きにわたり選者を担当した。没後、昭和 54 年「遠藤石村賞」と「遠藤石村句碑」が設立された。沖縄俳句界には絶大な貢献をなされている。このような俳人が私たち糸満市の大先輩いることを誇りに思う。三和中学校の校歌も「森英夫」の名前で作詞している。その、三和中学校の校歌には 3 つの理想が詠われている。平和が理想、正義が理想、真理が理想である。戦争終焉の地への思いだろうか。真壁にお越しの際は句碑を訪ねてはいかがでしょうか。



館長 金城毅

*三和村の由来

合併の最大の理由は戦争で三村に多くの犠牲者がでたことだ。戦前の真壁村、摩文仁村、喜屋武村、の三ヶ村は去った戦争で 4636 人に住民を失った。三村の全人口の 45% で約半数の村民が戦争の犠牲になった。それで残った当時の人口 4000 人余りでは、それぞれの村を組織することができず、三村有志が集まり、合併して力を合わせて、戦争により荒廃した村を興すことを誓い合い沖縄諮詞会と協議して、1946 年（昭和 21 年）4 月 4 日に、三村が合併して三和村として発足した。

※合併に先立ち、旧村ごとの委員が集まり、合併のための協議会をつくった。高嶺は結局 3 月には分離した。協議会とは議員で真壁 8 名、米須 4 名、喜屋武 4 名の計 16 名で、申し合わせによる議員である。名城の新垣義常氏が臨時の村長になり、村の名前は村民に公募して決めた。その村名は「イヤサカエ」とか「益栄」とか「田無村」とか、いろいろな名前が集まった。結局桜井さんという方のものの「三和」が適当だということで当選した。この名前には、三村が和やかに平和であれという願いが込められている。

*三和中学校校歌に込められた三つの理想 平和・正義・真理

※令和5年4月26日の wikipedia より引用 (最終更新 2022 年 11 月 13 日 (日) 18:38)

渡久地政信 (とくち まさのぶ)

恩納村に生まれ、少年期を鹿児島県の奄美大島龍郷町で過ごす。日本大学藝術学部卒業後、1943 年（昭和 18 年）、日本ビクターレコードより貴島正一の名で歌手デビュー。歌手時代は売れず、津村謙の前座を務めていたこともあった。津村は後に渡久地作曲した『上海帰りのリル』で大ヒットを飛ばすことになる^[1]。

1951 年（昭和 26 年）よりキングレコード専属の作曲家に転身（後に古巣のビクターに移籍）。以後、『上海帰りのリル』、『お富さん』、『島のブルース』など数多くのヒット曲を手掛ける。中山晋平メロディーが日本民謡、古賀政男メロディーが朝鮮民謡、服部良一メロディーがジャズを基調としているのに対し、渡久地メロディーは生まれ育った沖縄・奄美民謡をベースにしているといわれる。

1998 年 9 月 13 日、肺炎のため死去。81 歳没。没後、第 40 回日本レコード大賞特別功労賞が贈られている